

# 歴史学の研究手法・環境とオープンアクセス

日本近現代史研究の現場から

---

石居 人也

(一橋大学)

[hitonari.ishii@r.hit-u.ac.jp](mailto:hitonari.ishii@r.hit-u.ac.jp)

# 歴史学の研究手法 A

- ◆ 史料(歴史資料)発掘型
  - ・史料調査(能動的／受動的)
  - ・史料整理(所蔵家・機関／受入機関・個人)
  - ・目録作成・研究史把握
    - 解題・報告書を執筆
  - ・問題関心に照らして論文執筆
    - ⇒ 史料群の全体像把握・提示が優先
    - ⇒ 調査的側面を重視

# 歴史学の研究手法 B

- ◆ 課題設定型
  - ・問題関心
  - ・課題と論点の整理(研究文献)
  - ・史料収集(所蔵機関・所蔵家など)
  - ・史料分析(実物・画像・既刊史料集など)
  - ・論文執筆
    - ⇒目的意識が優先
    - ⇒研究(論文作成)的側面を重視

# 研究環境とオープンアクセス

- ◆ 史料に触れねばはじまらないという「神話」
  - ・一次史料(古文書)への偏重
    - 史料発掘(史料調査)が不可欠
- ◆ 精緻な史料分析にもとづいた研究の生命力
  - ・新史料の発見がなければ容易には覆らず
    - やはり史料発掘が不可欠
    - ⇒二次史料・文献(活字)では不十分
    - という認識のひろまり

# 研究者の「生態」とオープンアクセス

- ◆ 史料＝モノへの執着
  - ・すべてが「史料」
    - 捨てられない症候群
- ◆ 出版文化への親近感
  - ・紙媒体でなければ読めない
    - 結局はプリントアウト
  - ・早さよりも確実性？ 数よりも確実性？
    - ⇒自らも、モノを残す

# 手法の変化とオープンアクセス

- ◆ 実証の学から解釈の学へ(の兆し)
  - ・ 言語論的転回と構成主義的歴史学  
→ 史実(歴史的事実)の解明から  
史実に迫る「史実」の構成へ
  - ・ 史料の厳密な解釈にもとづく歴史像の提示  
→ 議論をとおした解釈の妥当性の鍛錬
  - ・ 検証可能性の担保がより重要に  
⇒ 典拠・参照情報のソースへのアクセス

# 環境の変化とオープンアクセス

- ◆ 史料の多様化
  - ・活字媒体・図像など
  - ・史料画像そのもののウェブ公開
- ◆ 調査→公開サイクルの加速
  - ・目録作成に終わりはない？
    - ワーキングペーパーの活用
    - 抱えこまれた史料の「解放」
    - ⇒不断の更新可能性への自覚と対応

# おわりに

- ◆ 決して高くはない(と感じられる)ニーズ
  - ・「頑な」な研究手法・環境、「生態」による
    - 「厳密」「厳格」であるという価値
    - ⇒歴史学の強み／弱み
- ◆ 変化の兆しをつかまえる
  - ・インプットなどの場面での活用機会の増加
    - 敷居はさがる傾向
    - ⇒固有のニーズに応じたあり方の模索を